

島崎藤村 『夜明け前』 読書ノート

文庫本へのメモ書きと付箋貼りが10数年を経て、
ボロボロの原本と1冊の読書ノートに姿を変えた。
人物700、語句・地名900に及ぶ注解と考察。

田口正郎

目次

まえがき	2
馬籠周辺の地名図	6
登場人物の章	9
登場人物検索	10
登場人物一覧	23
語句・地名の章	129
馬籠文学講座	217
講座資料一覧	219
講座での質疑応答	236
考察の章(1)～全編を通じて	246
仮名・実名	247
資料背景と『夜明け前』	250
藤村の歴史観	253
半蔵の「狂気」と正樹の「狂気」	256
考察の章(2)～お糸自害未遂事件	259
島崎家家系図	264
馬籠の町並み（明治5年）	266
あとがき	270

■登場人物検索表

注 (1) No.は本読書ノートにおける人物 No.を示す（登場順）。

(2) 初出の巻・頁は新潮文庫(平成 24 年改版以降の刷数のもの)により、巻は 1 上：第一部(上)、1 下：第一部(下)、2 上：第二部(上)、2 下：第二部(下)を示す。

(3) 登場人物名は作品の中に書かれている表現でピックアップし、検索名はそこから地名、藩名、屋号、肩書、形容詞などの後に来る姓名を基本の検索名とした。姓がないときは名前、両方がない時は書かれている表現(男、女、子供、武士、大名、弟子、妻など)とした。以下に例を示すがカッコの外が検索名になる。

- ・(伏見屋)小竹金兵衛 ・(妻籠本陣の)隠居 ・(薩州の御)隠居
- ・(隣村の)隠居和尚 ・(美濃の)浅井医師 ・(老中)稲葉美濃守
- ・(鼻の隆いお)婆さん ・(お)条

但し、「毒薬を仰いだもの」「囚われの身になっていたもの」など特徴的な表現の人物は「と」としたなど、応用的な検索名がある点をご容赦いただきたい。

50 音	登場人物	No.	初出	
			巻	頁
あ	青山吉左衛門	1	1 上	7
	青山半蔵	3	1 上	7
	青山次郎左衛門	27	1 上	39
	青山庄三郎	31	1 上	40
	青山寿平次	36	1 上	47
	浅見景蔵	50	1 上	57
	安島帯刀	128	1 上	193
	安藤対馬守信正	174	1 上	270
	(英国公使)アールコック	177	1 上	271
	阿野公誠	234	1 上	376
	姉小路公知	237	1 上	376
	安藤彦之進	366	1 下	238
	阿部豊後守	385	1 下	259

50 音	登場人物	No.	初出	
			巻	頁
(あ)	(監察)赤松左京	393	1 下	265
	浅井(の)医師	420	1 下	345
	荒川甚作	427	1 下	362
	浅野安芸守	451	2 上	53
	赤松護之助	482	2 上	108
	綾小路	485	2 上	116
	粟田知周	635	2 下	253
	(お条の二人の)愛児	655	2 下	311
	い 石川備前	32	1 上	40
	(隣村の)隠居和尚	58	1 上	81
	市川海老蔵	67	1 上	93
	(8 代目)市川団十郎	68	1 上	94
	(中津川の)和泉屋	86	1 上	116

■登場人物一覧

注 (1) 本表は新潮文庫（平成 24 年改版以降の刷数のもの）に基づき作成した。

- (2) 登場人物は登場順に人物 No.（検索表の No.と一致する）で示し、登場人物欄には複数の登場人物を一人に代表させて表した場合がある。
- (3) 登場人物名のふりがなは新潮文庫のものをそのまま転載した。
- (4) 文中の「1 上」は第一部(上)、「1 下」は第一部(下)、「2 上」は第二部(上)、「2 下」は第二部(下)を示す。「資料 No.」は馬籠文学講座の資料を示す。
- (5) No.の欠番や枝番（例:No.4-2）については表末の備考欄で補足説明する。

第一部（上）

No.	登場人物	作品上の描写	モデル・実名等
1	青山吉左衛門	本陣・問屋・庄屋。青山家16代当主。馬籠生まれ、物語の始め55歳。出入りの百姓13人。大きな肉厚の鼻から「本陣鼻」。実家は亀屋(1下p10)。「永代苗字帯刀・藩主お目見え」(1上p24)。吉左衛門は「多分に信濃の百姓」、金兵衛は「商才に富む美濃人の血」「金兵衛さんの家と俺の家とは違う」(1上p39)。モデルの吉左衛門は美濃岩村出身で大脇兵右衛門は馬籠出身という事実とは逆の設定。「金兵衛さんと違って村中の百姓を自分の子のように考える」(1上p41)。誕生日八月朔日(1上p45)。中風にかかる(1上p329)。「庭掃除好き」(1上p341)。	島崎吉左衛門重韶、島崎家16代当主、隠居名半六。『夜明け前』では「半六」は15代島崎家当主重好、つまり半蔵の祖父として設定されている。岩村の山上家から養子に入る。妻由嘉(14代道賢の女)病死後、後妻に桂を娶る。歴史上の人物を除く登場人物のほとんどが仮名であるのに吉左衛門とお玉、牛行司利三郎は実名で登場する。明治2年8月4日没。71歳。(鈴木昭一氏翻刻『年内諸事日記帳三拾番』その二p25)。「亀屋」という屋号は藤村が取材・旅行等でよく宿泊した下諏訪元本陣岩波家の宿舎聴泉閣「かめや」(現在も営業中)の

語句・地名の章

語句・地名の章

『夜明け前』は歴史小説である。この物語が描写された背景には史実があり、その舞台になった場所がある。前章の登場人物と同様に、物語を伝える語句や地名を表に整理していけばその過程で理解が深まるし、再読する時や歴史を検証する時に一定のガイド役になるのではないか。これがそもそもの発想であった。

何回もの読破失敗を経て、初めて通読できた時は本の中を行きつ戻りつの繰り返しであったので、感動はしたが疲労もした。しかし理解し得たとは到底言えず2度目、3度目となったわけであるが、途中から行った文献調べも全くの独学で捗らなかった。そこを突破できたのは「馬籠文学講座」である。鈴木昭一先生から対面で修得させていただいた知識は、自分にとって理解度を上げる強力なパワーになり、それを書き込んだ注解表は大変充実した。ただ一方では自責に帰す掘り下げ不十分なところは残っているのだが、本章では語句・地名について注解し『夜明け前』の読解に供したい。



落合の石畳(岐阜県中津川市落合)
中山道の西の入り口である落合宿から十曲峠を経て馬籠宿に至る途中、
全長 840m が復興されて残る。(写真撮影 中島正幸)

- 注 (1) 本表は新潮文庫（平成 24 年改版以降の刷数のもの）を基本に作成した。
- (2) 語句・地名欄は『夜明け前』の原文どおりに記載したが、長文は筆者が要約した。またその語句・地名と関連する他の記述を「－関連－」として記した。
- (3) 文中の「1 上」は第一部(上)、「1 下」は第一部(下)、「2 上」は第二部(上)、「2 下」は第二部(下)を示す。「資料 No.」は馬籠文学講座の資料を示す。

第一部（上）

頁	語句・地名	注解
5	木曽路はすべて山の中である －関連－ 木曾谷三十三 カ村 (1上p12) (併合による)木曾谷十六カ村(2下p213)	『木曽路名所図会』の三留野の項「木曽路はみな山中なり。名にしおふ深山幽谷にて岨づたひに行くかけ路多し、(後略)」が出典であることは明白であると言われている(北小路健「木曽路文献の旅 『夜明け前』探究」p270)。小説の終盤に「あの木曾の名所図絵」とそれとなく記述されている(2下p257)。藤村はこの小説の題について『森林』にするか『夜明け前』にするかで迷ったと言われているが(島崎静子「藤村の思い出」資料No.16)、「木曾山林事件」はこの小説の重要な主題の一つであり、単に木曾の情景を描いた一文ではなく、ある意味では『夜明け前』の主題をいきなり冒頭から提示していると言える。
	岨づたひ	本来は「そわ/そは」。『木曽路名所図会』では岨(そ者<そは・そば>)。
	桜沢	賛川と洗馬の間にある地名。
	名高い棧も、薦のかずらを頼みにしたような危ない場処ではなくなって	木曾の棧とは、現上松町の木曾川に架かっている鉄筋の橋が棧と思われがちだが、国道19号沿いの断崖絶壁に並行して、横に架けられていた「波計 ^{はばかり} の棧」と呼ばれる、藤蔓で編んで架けられた約100mの棧道のことである(「木曾の棧」案内板)。「波計」は地名(『上松町誌』)。『上松町誌』 p350には明治9年当時の棧の絵図が掲載されている。尾張藩始祖徳川義直が命じて造らせた。「棧や いのちをからむ 薦かづら」芭蕉(『更科紀行』)。

馬籠文学講座

2007年（平成19年）4月12日から2017年（平成29年）8月19日までほぼ月1回開講された馬籠文学講座「『夜明け前』を読む」。10年間114回、配布された資料等は約470枚（B4両面刷り）。この講座の外に聴講した記念講演等があったので約120回、資料は500枚になる。講師は藤村学会名誉会長で帝塚山短期大学名誉教授鈴木昭一先生。

聴講者は皆大変真剣でほとんど毎回出席されていた。私は途中からの聴講だったが、この講座は様々な人との出会いの場でもあった。長野県安曇野から参加されているご夫婦（ご主人は藤村に関する著書を何冊か出版され、奥様は『夜明け前』全文を音読し録音されている）、坂本龍馬が歩いた道をすべて踏破したという人、苗木藩の参勤交代に関する著書を出している人、長野県飯田市の会社の社長さん、その他親しく話は出来なかったが、単なる藤村ファンとしてではなくそれぞれの想いを胸に参加されているということは充分感じとることができた。ただこの10年間で私が知っているだけで3人の聴講者が亡くなっている。

鈴木先生は講座を淡々と進められながらも、藤村が参考にしたと言われる膨大な資料やふだん我々が眼にする機会の少ない古文書等の史料の提示と解説、それらに基づく『夜明け前』の分析及び批評など、学問に対する姿勢と信念、一つの作品を研究することの大変さと史料読みの重要性などを教示していただいた。

また、先生の豊かな教養とお人柄で、私自身がこの年になって少しは勉強してみようかという意欲をも与えていただいた。私は素人の図々しさで何度も先生に幼稚な質問をしたり、手紙を出して多忙を極める先生の手を煩わしたが、その都度裏付け史料等をご教示されて、懇切丁寧なご回答をいただいた。この場を借りて心からお礼申し上げたい。

ご講義の合間に、時々チクリと言われる体制・文明批評にも感銘を受けた。昭和一ケタ生まれということで、講座の中で何度も「軍国少年として教育を受けた」ということを言われ、終戦を挟んでの価値観の転換というご経験から時の体制に対する批判精神をお持ちであることを言葉の端々に感じた。さらに講座当時のご年齢が80代後

No.	Q&A	質疑応答内容
7-6	Q	○誕生とは？（「たんじょう」と「たじゅう」） 「和助は誕生後二ヶ月にもなるが、まだ口がきけない。立って歩くことも出来ない」（第二部上第七章<二>）とあるが、明らかに「一歳と二ヶ月」の間違いではないでしょうか？
	A	同意見です。
	補足	新潮文庫『夜明け前』注解（滝藤満義編）にも「正しくは一年二ヶ月であろう」としてあり、筆者自身も鈴木先生同様に当初はそうと思っていたが、この地方の方言では1歳の誕生日のことを「たじゅう」と呼ぶことに気づいた。 藤村はこれを用いて、「誕生後二ヶ月」は「たじゅう後二ヶ月」即ち「一歳と二ヶ月」したのではないという筆者としての解釈にたどりつき現在に至っている。この検証経緯は語句・地名の章の第二部上353頁欄に詳述した。
7-7	Q	○広助の姓（野代と野城） 「野代広助」（第一部上第六章<五>）、「野城広助」（第二部下第十一章<三>）。 どちらが正しいのですか？
	A	野城が正しい。
7-8	Q	○「はじめる」の適用漢字（初めると始める） 「通い初める」（第一部上第5章<二>）は「通い始める」の間違いではないでしょうか？
	A	同意見です。
7-9	Q	○上穂の読み方（「かみほ」と「うわぶ」） 「上穂（かみほ）」（第一部下第10章<二>）は「上穂（うわぶ）」の間違いではないでしょうか？
	A	同意見です。
7-10	Q	○峠名の俗称（クラヤミ峠とクラミ峠） 「クラヤミ峠」（第一部下第十一章<一>）は「クラミ峠（倉見峠）」の間違いと思われるが、昼でも暗いと言われているところから、藤村の意図的な表現でしょうか？ （参考）『賊徒行末うつし』（人夫として天狗党に敦賀まで連行された信州下伊那飯島村の降蔵が赦免されて帰宅するまでの天狗党の行動の

考察の章(1)～全編を通じて

前章までで、「登場人物」「語句・地名」「馬籠文学講座」の3つの切り口から『夜明け前』を表の形に整理してきた。しかし『夜明け前』はこのような私流のやり方の中に量的にも質的にも収まり切る筈のない大作である。実際にもこれらの表は数えきれないほどの加筆修正を加えてもなおその完成度に満足できず、出版をためらわせる要因の一つになったのだが、作品の読み込み、背景資料の判読、参考文献の検証などから得た作品に関する情報は、可能な限りそれらの表の中に収めるよう努力した。

この章は、表の中で書き切れなかったものを補完するという意味合いはなくはないが、むしろ逆に、表の中に埋没させたくない興味深い発見や全編から受けた感銘とその要因について、少し断片的ではあるが「考察の章」として記述したい。ただし文献から得た知見が多いため、それをベースにした幼い「読書感想文」の様相を呈してしまっているところをご容赦願いたい。



「是よ里(り)北 木曾路」の石碑

(岐阜県中津川市馬籠)

かつては美濃国と信濃国の国境であり、石碑はここから木曾路の入口であることを示す。

1940年(昭和15年)68歳だった藤村の揮毫。(写真撮影 筆者)

■仮名と実名

ここでいう仮名、実名とは『夜明け前』に登場する人物や屋号などの「ネーミング」に関するものである。物語を理解する上で登場人物の名前の付け方やそのモデルなどを考察するのは、或る面では考察というより詮索かも知れないが、国文学者の北小路健氏は、「藤村の場合には何か特別な意図があるように思われ、創作過程の一つの秘密を探り当てる鍵ではないか」と指摘している(「木曾路文献の旅 『夜明け前』探究」)。

藤村自身は『夜明け前』について「作品の中で働くようなものは仮名、そうでないものは実名」と解説している(筑摩書房『藤村全集』第12巻)。

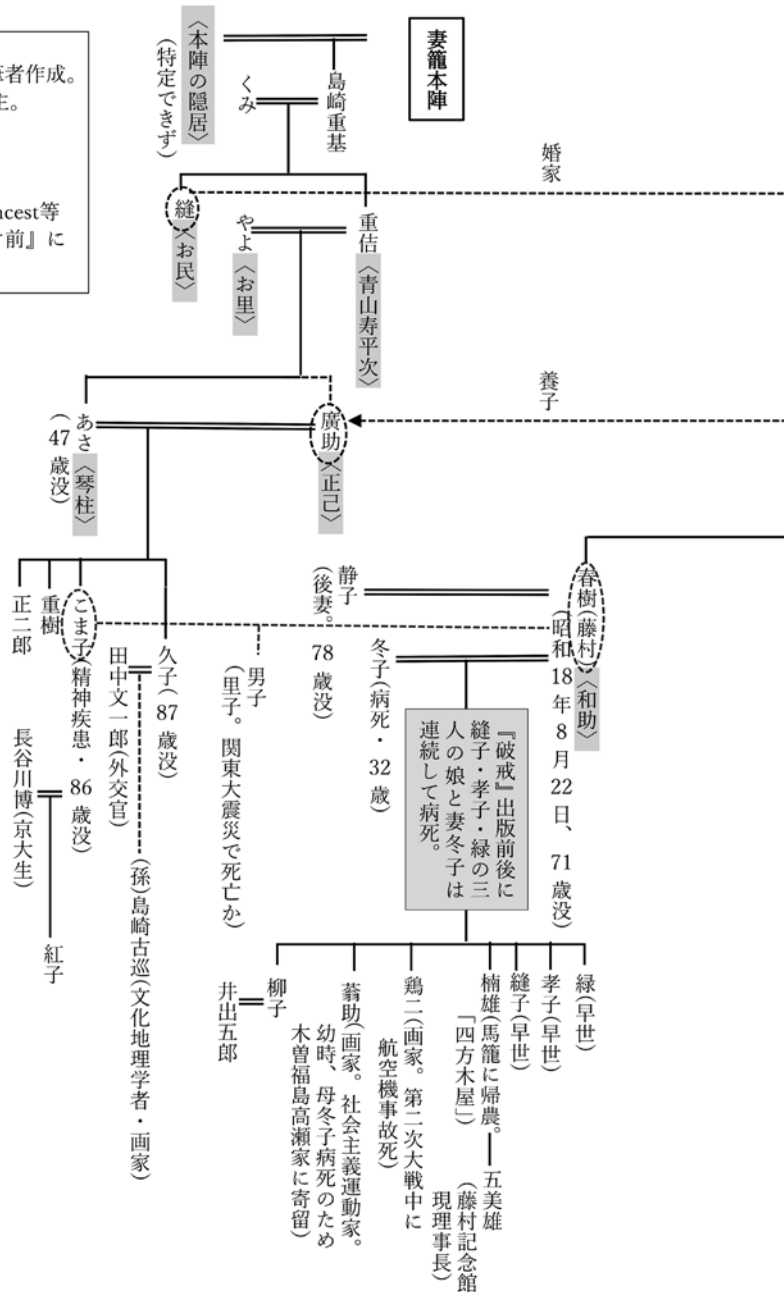
しかしながら登場人物には働く人(屋号などを含む)が圧倒的に多いのであるが、その仮名は、仮名というよりは実名の入れ替えとして使われたのではないかとと思われるところが大変多い。現在までにそれを裏づける資料を発見できておらず、そういう意味では個人的推測の域を出ないのであるが、その蓋然性の特に高い例を以下に示す。

No.は本読書ノートにおける人物No.を示し、登場人物一覧表の中でもこの章でとり上げる内容を一部記述した。なお十分に働く人物なのに「吉左衛門」と「お玉」さらに「牛行事利三郎」はなぜか実名である。

- ・(No.1) 吉左衛門の実家としている「亀屋」は、藤村が利用したと言われる長野県下諏訪旧本陣岩波家旅館「聴泉閣かめや」。
- ・(No.3)「青山半蔵」の姓は維新後の苗木藩士「青山」景通・直道の父子(直道は家老に相当する大参事に就いた)、名は大黒屋の親戚筋に当たる山口村第7代庄屋外垣「半蔵」(『山口村誌』上巻p498)。
- ・(No.8)「梅屋与次右衛門」は島崎重次(島崎家一世重通の弟)の幼名「興次右衛門」。
- ・(No.17)「仙十郎」は吉左衛門重韶の後妻桂の連れ子の由伎と再婚した「千十郎」。
- ・(No.19)「宮川(寛斎)」は間秀矩の実弟慶三(「仙十郎」)が養子に入った南木曾の「宮川家」。
- ・(No.24)「(小笹屋)勝七」は八幡屋蜂谷家4代目源十郎政興の幼名「勝七」。

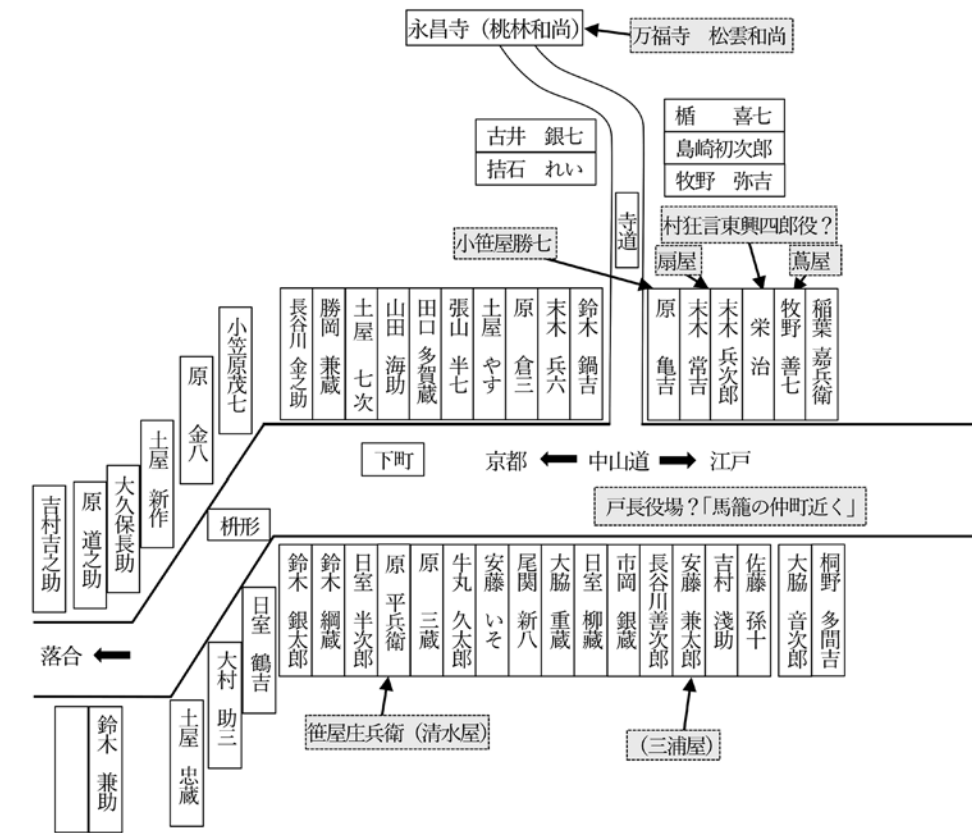
島崎家家系図

- 注
 (1)参考文献をもとに筆者作成。
 (2)⑬～⑲は島崎家当主。
 (3)線の区分は
 — 夫婦関係
 — 親子関係
 - - - 養子・孫・incest等
 (4)〈〇〇〉は『夜明け前』に登場する人物名。



馬籠の町並み(明治5年)

注(1)『山口村誌』下巻をもとに筆者作成。
 ～戸数96軒～



注(2) 〇〇は『夜明け前』の登場人物・屋号・建物等。
 ()内は現在の屋号・建物。
 戸長役場と高札場の?は場所を特定できず。